

盛大に嫉妬させてしまう

この前のダンスサークルの三次会は、半分記憶を飛ばしながらの会になってしまった。友達の為に泥酔してめっちゃ頑張った結果、凄く仲良しになったとは思いますが、一つ大きな問題が起きてしまったのだ。

私はネットニュースの小さな記事を見て、ふうつとため息をついている。

「マズいなあ…」

なぜそんなに落ち込んでいるのかというと、この前の三次会の後の写真がネットニュースになってしまったから。

なんと、路上で御堂君が私をお姫様抱っこしているところや、後ろから抱き着いているところが乗っていたのである。もちろん御堂君もそんなにスターというわけでは無いのだが、ネットの小さい記事になるくらいには注目されていた。何故かというとユーチューブやSNSをやっている、登録者も多いインフルエンサーでもあるからだ。

不幸中の幸いと言えば、私も私の友達も御堂君の友達にもモザイクがかけられている事。だけどモザイクをかけられたところで、一般人には分からなくても大学内では直ぐにうわさが広がってしまう。まあ大学は別に恋愛をしちゃいけない訳じゃないので、退学になったりすることはないが、いろいろと心配な事はあった。

「マズいよねえ…」

友達も言う。私と御堂君は付き合っているわけでもないのに、学内では恋人同士だと噂されている。私の友達も、自分の為を思っ盛り返さようとした私の事を庇うようにしてくれていた。

「どんな顔して彼氏に会ったらいいのか分からない」

「言わなきゃ分かんないよ」

「隠し事とかしたくないんだけど」

「まあ…そうだけどもさあ」

今日、私はアパレルショップ店長の乙坂さんと会う約束をしていた。その前に、友達と緊急ミーティングをしていたのだが、答えは出ずに友達とバイバイする事になる。

「じゃ、行つて来ます」

「がんばってね。きっと大丈夫だよ」

いつもは、ウッキウキで会いに行くのだが、心なしか足取りが重い。

待ち合わせ場所に行くと、今日は仕事が休みだった乙坂さんが手をあげてくる。私も一生懸命の笑顔を作り、乙坂さんの腕に抱きついた。

「おっ。どうした？ 今日はいきなりラブモード全開？」

「うん！」

元気を装っているが、学校で問題になっているのは確かだし、ちょっと気分が重たくなってくる。

「んじゃ。今日はざつくばらんに焼肉でいいんだね」

「お肉！ 食べたいです！」

二人が向かった先は個室の焼肉屋さんだった。そして乙坂さんがお肉を注文し、二人で焼き肉を食べ始める。

だけど、やっぱり乙坂さんは鋭かった。

「なんかあった？」

やっぱり黙ってられない。

「うん」

「言ってごらん」

「あの、怒らないで聞いてくれる？」

「ああ」

私の様子に、乙坂さんは若干身構えている。やっぱり、私の声のトーンがいつもと違ったのかも。

私はスマートフォンを取り出して、例のネットニュースの記事を開き乙坂さんに見せる。

「これなんだけど」

「ネットニュース？」

まじまじとその記事の写真を見て、乙坂さんはそれがなんだか気が付いたようだった。

「これ…唯花じゃない？」

「うん。ダンスサークルの飲み会で、飲み過ぎてサークルメンバーとぶざけ合った結果がこれなの…。ごめんなさい」

乙坂さんが、じっとそれを見て固まっている。そりやそうだ、自分の彼女がバックからハグされているのなんか見たくない。

「これ…なに？」

「実はあまり覚えていないの。友達と飲んで泥酔して、その男の人がちよつと有名な人で撮られちゃったみたい」

「いちやついているように見えるけど？」

「本当に何もないの」

「ふーん」

明らかに不機嫌になっている。

「ごめんなさい」

「まあ…何もないって言うなら問題ないんだろ。他に問題は？」

「学校内で、私がその人と付き合ってると思われるの」

「だろうねえ。こんな写真が出回ったんじゃ、いくらモザイクがかかっているにしても一緒にいた人は分かるし」

「でも、私はそんなつもりじゃないの！ だって乙坂さんっていう彼氏がいるのに、そんな勘違いされたら迷惑なの」

「まあ…とりあえず。飯を食おうか、腹が減つてるとイライラしてしまう」

「うん…」

あーあ。怒らせちゃったかな。それからあまり会話も弾まなかったが、お腹がいっぱいになった事で落ち着いてはきた。会計を終わらせた乙坂さんが言う。

「行くぞ」

どきどき。

いつもより少し冷たい乙坂さんの声に、鼓動が早まって来る。

「うん」

焼肉屋さんを出て、しばらく歩いているが乙坂さんの口数は少なかった。やっぱりさっきの事で、乙坂さんの機嫌を損ねてしまったらしい。でも…悪いのは私だし、何も言う事はなかった。

乙坂さんが突然タクシーを拾って、辿り着いた先はあるビルの前。黙って乙坂さんについてビルに入っていくと、そこが何の店なのかが私にも分かる。そこはアダルトグッズの店だった。

「恥ずかしい…」

「人前でバックハグや、お姫様抱っこで下着を晒すのは恥ずかしくないのか？」

「……めんなさい」

正論にぐうの音も出ずに、二人でアダルトグッズショップに入る。乙坂さんがいろいろと物色して買い始め、私はただそれを見ているしかなかった。次々に道具を買い込んでいる乙坂さんは、淡々としていてレジを済ませた後で私に言う。

「唯花には、分かってもらわないといけないから」

「はい…」

「いくぞ」

「うん……」

それから、乙坂さんが私を連れて来たのはラブホ街だった。

「まだ、俺の愛情が足らなかったみたいだな」

「そんな事ない。いつも乙坂さんの事を考えているし」

「いや。俺がもっと愛情を注がないとダメだなって思った」

「……」

もう何も言えなかった。こうなったら、乙坂さんが納得するまで付き合うしかない。

「ここにしよう」

「はい」

乙坂さんが選んだラブホテルに入り、部屋を選んで廊下を進む。そして部屋に入った瞬間に乙坂さんが言う。

「今日は、お仕置きだ」

「うん」

乙坂さんが先に部屋に入って行った。私はしずしずとついて行く。

何をするんだろう……。

私は仕方なく次の乙坂さんの指示を待つ。すると乙坂さんは、ソファ―に座って冷静に言う。

「じゃあ、脱いで」

「ここですか？」

「そう」

私はすりと上着を脱いでベッドに置いた。じっと見られているだけで、めちゃくちゃ恥ずかしい。

私が乙坂さんを見ると、また冷静に言う。

「次はブラウスだ」

「はい」

怖い。いつもの乙坂さんじゃない。

ブラウスのボタンをひとつひとつ外していく。だんだんと指先が震えてくるが、それでも乙坂さんは黙って見ていた。全てを外すとブラジャーが露わになって、私が胸を隠そうとすると乙坂さんが言う。

「隠すな」

「はい」

震える手でブラウスを脱いで、ベッドに置いた。

「唯花は俺だけのものだ」

「うん…そうだよ」

「誰も触れちゃいけない」

「うん……」

そして次に、乙坂さんが指をさす。

「スカートを降ろして」

「はい」



スカートのホックを外し、ファスナーを降ろしてすりと脱いだ。私は乙坂さんの前で、ブラジャーとパンティーと靴下だけになる。なんだろう？ いつも裸は見られているはずなのに、こんなにも恥ずかしいなんて。

隠す事も許されないのです、そのまま直立で体を晒している。乙坂さんは、ただそれを冷たい目で見つめ、私はなすすべもない。

「次はどっちを脱ぎたい？」

「あの」

「どっち？」

「ブラ」

「外して」

背中に手を回してホックを外すと、ハラリとブラジャーが落ちる。スツと胸の前に手を当てると、乙坂さんが言う。

「隠して良いつて言ったか？」

「言っていない」

「じゃあ手を降ろして」

言われるがままにする。乳房を晒して、廊下に立たされた子供のように立ち尽くす。

そして乙坂さんが沈黙した。しばらくそのままだったので私が聞いてみる。

「どうすればいい？」

「どうすればいいか、自分で考えてみて？」

うう…。冷たいよお…。怒ってるよお…。

「パンティーを脱ぎます」

「思ったようにして」

「うん」

私は、スルスルとパンティーを下げてベッドに置いた。そして、また乙坂さんに向かって立つ。すると乙坂さんが聞いて来る。

「どう？」

「恥ずかしい」

「醜態を晒すより？」

と聞かれると、そうじゃないような気がする。人前であんな醜態をカメラに収められるのと、乙坂さんの前で裸を晒すのとは全く違う。

「それよりは恥ずかしくない」

「どういう気持ち？」

「乙坂さんに見られるなら嬉しいけど…恥ずかしい」

「そうか」

そしてまた乙坂さんが、靴下しか穿いてない私を凝視する。私はただぼつんと立って、体を隠す事も出来ない。

「これは俺だけのものだよね？」

「うん」

「よし。こっちにおいで」

そう言われる事でホッとする。私が裸で乙坂さんの前に来ると、乙坂さんはソファから立ち上がって私をソファに座らせた。

彼はさっきのアダルトショップで買った紙袋から、鎖で繋がれたベルトを取り出した。

びくん。

ちよつと怖くなってきた。だけど、何も言う事が出来ずにただ見ている。